総合都市研究　第69号　1999

中国における都市高齢者の「生きがい」

1．はじめに－生きがいの概念と中国の都市化・高齢化－
2．「生きがい」の実態
3．高齢者の生活意識と生きがい

高　橋　勇　悦*
黒　岩　亮　子**

要　　約

本稿は、中国における都市高齢者5人の「生きがい」に関する事例調査研究をとりまとめたものである。われわれは、生きがいという場合、生きがいの対象と生きがい感を区別し、生きがい感については、よろこび（喜び・歓び）、満足感、幸福感、充実感や、これらの言葉に関連が深いと思われる、嬉しさ、楽しさ、達成感、貢献・奉仕（の精神）などの言葉を使用し、面接聴取を行った。その結果、5人の高齢者の面接聴取に関する限り、中国における都市高齢者の「生きがい」は、友人関係・近隣関係や趣味・スポーツよりも、仕事を通じての社会的な貢献・奉仕と伝統的な家族制度における家族・親族の交流のほうに、深いかかわりをもっている、ということが明らかになった。

1．はじめに－生きがいの概念と中国の都市化・高齢化－

われわれは、高齢社会・日本の都市高齢者の生きがいについて、その特質と意義を明らかにする目的のもとに、世界各国の都市高齢者の生きがいに関する比較研究を試みてきた。本稿は、中国の都市高齢者の生きがいに関する面接記録と若干の分析コメントとを主な内容とする調査報告である[1]。

「生きがい」という言葉は、今日の日本人には特別の注釈・解説がなくとも、ほぼその意味を理解できる言葉になっていると思われる。例えば、「あなたの生きがいは何ですか」と質問しても、一応はほぼそのまま回答が返ってくるようになっている。しかし、生きがいに相当する中国語は存在しない。中国だけでなく、われわれが調査したヨーロッパやアジアの各国においても、生きがいに相当する言葉は存在しなかった。その限りでは、生きがいという問題は、きわめて日本的な問題ではないかと思わせるところがある。最近の身近な国語辞典をひくと、生きるはりあい、よろこび、めあて（目標）といった意味のことが書かれている。日本で一般に流布している生きがいの意味は大体そんなものであろうと思われる。しかし、それにしても、生きがいという言葉は、かなり多義的で、あいまいな言葉である。実際、生きがいという言葉の意味をめぐる議論は少なくない。

神谷美恵子は、生きがいという言葉の使い方には、生きがいの対象または源泉となるものを指す

*大妻女子大学
**日本女子大学大学院（博士課程）

ときと、生きがいを感じている精神状態を意味するときと、二通りあると指摘している。「あなたの生きがいは何ですか」という質問に「この子が私の生きがいです」という回答が返ってくれば、それは生きがいの対象を指している。生きがいを感じている精神状態は、これと区別され、「生きがい感」とよばれる。この生きがい感は、子どものあそびにおける喜悦だとか子どもを出産した直後の母親の歓喜を、そのもっとも純粋にして典型的な範型とするような、「生きるよろこび」であるという。この生きがい感に近いと思われる言葉として「心の張り」「充実感」があり、さらにこの「心の張り」「充実感」に近い言葉として「満足感」・「幸福感」がある[2]。

われわれは、基本的にはこのような考え方に従い、面接聴取においては、生きがいという場合、生きがいの対象と生きがい感を区別し、生きがい感については、これらの、よろこび（喜び・歓び）、満足感、幸福感、充実感や、これらの言葉に関連が深いと思われる、嬉しさ、楽しさ、達成感などの言葉を使用した。面接聴取の内容は、これまで私たちが世界各国で使用してきた調査票に基づいているが、必ずしもこの調査票だけにこだわらず、かなり自由な質問も試みている。

さて、周知のように、今日の中国は、近代化（産業化・都市化）がめざましく展開するなかで、所得水準の上昇や女性労働力率の上昇などが見られる一方、「一人っ子政策」を含むきびしい人口抑制政策をとっていて、少子化・高齢化の急激な進行に直面している。1995年現在の60歳以上人口は9.5%、65歳以上は6.1%（日本は同年それぞれ、20.1%、14.1%）の状態にあるが、少子化・高齢化の進行のテンポは、日本以上に急速であるといわれる[3]。こうした少子化・高齢化の進行は、近い将来、高齢者問題を含む福祉問題を急速に拡大することは必至であろう。

また、国家の政策（戸籍制度）によって都市への人口移動は規制されているものの、特に北京市や上海市などの大都市の人口増は続いているようである。北京市の場合、1980年代に入ってから人口増加が目立ちはじめ、1995年には1,236万人に達し、2000年には1,420万人におよぶと予測され、1995年ですでに東京都の人口1,179万人を超えるほどになった。北京市はこの急激な人口増（流入人口の増加）により、住宅問題、交通問題、公害問題、水問題等、さまざまの都市問題を抱え込んでいる。しかし、全人口の圧倒的多数は農村人口であって、1993年現在であるが、農村人口は71%、都市人口は29%（日本は、同年23%、77%）になっており、依然として農村人口の比重はかなり大きい[4]。北京市もそうだが、大都市自体が多くの農村人口を含んでいる。しばしば指摘されるように、中国の都市と農村の経済格差も依然として大きく、これが高齢者問題にもはねかえってくるという状況がある。

われわれが調査を行った都市は河北省の三河市である。三河市は、北京市の東50キロ（30公理）の位置にある、人口約40万人の都市である（1993年現在）。「7鎮16郷、395の行政村に区画されている。西の燕郊鎮と中心地の拘河湾は経済開発区に指定され、集中的な投資が行われている」[5]。この経済開発のため、また北京市に隣接していることもあって、北京市との経済的な関係はより深まっているようである。

三河市の説明によれば、三河市は、中国の西北にある、経済的にはいわば中レベルの都市である。高齢者の生活は豊かになり、平均寿命も71.7才（1997年）に及び、高齢化が進んでいる。従来親夫婦と子夫婦の同居が多いのだが、最近は核家族が増大し、親夫婦と子夫婦が別居する傾向も目立つようになった。青年の独立の意向が強くなってきたのが一因である。ただし、同じ地域での別居の形態が多く、また、少なくとも1週に1回は子は親を訪れる習慣が続いている。こうした状況が進行しているため、例えば、高齢者の「孤独」の問題も生じてきて、確かに、高齢化は問題になってきた。しかし、高齢者は、概して、退職者の施設・活性化センターを利用したクラブ活動などをはじめ、さまざまの活動が活発に行われており、高齢者のライフスタイルも多様になってきている。

調査の対象者5人の居住地は、三河市の中心地にある三河市役所（三河市政府）の周辺の市街地

高齢者面接聴取一覧

	性別 年齢	出身地 兄弟	家族構成	居住形態	健康 状態	経済状態	本人の 学歴	本人の 職歴	現在の職業 と生活	夫婦関係 親戚関係	子供との関係 孫との関係	社会活動 趣味活動	友人	楽しいこと・ 嬉しいこと	重要なこと・ 価値のあること	心配なこと
①	男 70歳	三河市より15kmの農村 6人	妻・娘4人(既婚)・孫9人	妻と四女一家との5人暮らし 持ち家	良好	年金(月964～965元) 補助金	13歳で退学	政府の幹部	1993年に退職（65歳） 散歩・気功・読書	家事は時々手伝う	子供達が親孝行してくれる	何か重要なことがあると市政府が意見を求めにくる	書道協会や老人大学などの趣味のあう友人	過去を追憶して充実したと実感する時	国の発展と健全な成長 社会に多くの力を捧げ、他人に役立つこと	何も心配がなくみな指導者のおかげ
②	男 67歳	三河市より50kmの河北省玉田県 4人	妻・息子1人・娘2人（既婚）・孫3人	妻と2人暮らし 持ち家	良好	年金 医療費と車代	北京華北人民大学	政府の幹部	1993年に退職（62歳） 気功・散歩・読書。老年大学の講座を学び、時々田舎の友人を訪ねる	家事は妻と順番 兄弟とは春節をはじめ、年に1～2回は会い、普段は電話で交流をする	土曜日は長女・次女一家が必ず訪ね、長男は近くに居住 孫は毎日放課後に訪ねてくる	市の様々な活動に参加するようにしている スポーツ・読書・料理	老年大学の友人や昔の同僚や田舎の知り合いなど	毎日の生活は穏やかで特別な事はないが、孫が家にいてはしゃぐのは嬉しい	健康や快適さ・よく回転する頭 今まで生き残れて幸運・幸福だったから自分の価値を生かし「克己貢献」の道徳や人生観を若者に伝えたい	毎日大変楽でのんきな生活で満足 党と政府が世話してくれ有り難い
③	女	北京通県 5人	夫は死別・息子2人・娘2人(既婚)・孫	長男一家と4人暮らし	あまり良くない	年金・居住委員会の給料・印刷工場収入	小学校卒業	政府の幹部	1981年に退職後、西区居住委員会の主任となり、現役 仕事で忙しいが朝は体操、夜は散歩	兄弟とは、年に1、2回は会い、姉はよく訪ねてくれる	別居の子供は誕生日などに集まる 仕事で同居の孫の面倒を見られないので手伝いを雇う	居住委員会 新聞を読むこと		住民の問題を解決できると嬉しい	仕事 人間、特に女性は社会に奉仕すべきで、自立すべき	
④	男	三河市高楼鎮の農村 3人	妻・息子1人・娘1人（既婚）・孫3人	妻と2人暮らし 持ち家	良好	年金（妻＝月1184元・本人＝月800元）／医療費	中学校を1年で退学	政府の幹部で退職	退職後、社会活動と工場経営 朝はマラソンと気功、午前は仕事をし、午後は休む	「男は外回り、女は家回り」	日曜日には子供達が家事をし親孝行をしてくれ、一家団欒 孫は学校の帰りに昼御飯を食べる	若いリーダーに意見をする。作家を支援し、市の文化事業の繁栄に貢献 運動（マラソンや気功）		1.社会に役立つ事（自分の経験を生かし若者を培う） 2.家族が睦まじい事 3.孫を社会に役立つ人間に培うこと	仕事上の名声・健康 公明正大を心がけ、他人に優しく自分に厳しく	他人に誤解されること
⑤	男 75歳	三河市の西の農村 2人	妻・娘5人、息子2人（既婚）・孫11人	妻と2人暮らし 三進の家で息子2人と隣居	良好	2人の息子から月50元づつもらう／畑	小学校卒業	農業（麦ととうもろこしの二毛作）	1995年、72歳で引退して分家 散歩や買い物、孫の送り迎えや田畑の手伝い	妻は食事や洗濯・留守番、自分は買い物など分担	近くに住み、祭日や誕生日には、大きな鍋を囲んで一緒に食事 しょっちゅう遊びに来る	畑の手伝い 散歩・ロバを飼うこと・将棋を見ること	夕食後に近所の人達と大通りでしゃべる	新年や節目に家族みんなで団欒すること	うちのすべてが順調で娘も息子も親孝行をしてくれて幸せ	心配事もない

である。三河市役所の紹介の関係から、面接対象者5人は三河市役所に何らかの関係がある人々になった点は、留意する必要がある。

2.「生きがい」の実態

(1) 国家や社会への貢献・奉仕

今回の面接聴取に協力して頂いた5名のうち4名までが、政府の幹部（公務員）として仕事を続けてきた方々であった。そのためか、彼らの大きな関心の一つに、「国家の繁栄」がある。現在の高齢者の世代は日本帝国支配、第二次世界大戦、文化大革命などの激動の時代を生きてきた。彼らは中国の教育のみならず日本語教育、共産党教育といった特定の教育も受けてきた世代である。このような背景を持っていて、しかも政府の幹部であった高齢者であるために、中華人民共和国という自らの国家に対する思いは特に強いように思われる。国家の繁栄のために数々の苦難をひたすらに耐え続け、真面目に仕事をこなしてきた彼らにとって、現在の中国の経済的発展は誇りであると同時に、今後の方向性は個人的にも重要な関心事にもなっている。

この世代の高齢者にとって、国家の繁栄・発展は、仕事を通じて、自分が社会に役立つ存在であること、社会に自分の全力を捧げること（『克己貢献』）の証であり、それがもっとも「嬉しいこと」、「重要なこと」、「価値のあるもの」、「大切なもの」である。そこには、社会的な貢献・奉仕の強い意識があり、人生や生活の「充実感」もともなっていて、まさに「生きがい」に通じるものがあるといっていいであろう。ここで留意したい第一は、この社会的な貢献・奉仕の意識は仕事を全うするなかで感得されているということである。つまり、仕事が貢献・奉仕意識の直接の源泉である。第二は、退職後の現在なお、貢献・奉仕意識は、過去の人生の充実感を想起させると同時に、現在の生活の充実感をあたえるものになっている、ということである。貢献・奉仕意識は過去のみならず現在に活きているのであるが、これはおそらく未来にも活かされる。第三に、これと深くかかわっているのが、自分の孫や若い世代に国家・社会に対する貢献・奉仕意識を教えたいという、高齢者が持っている使命感である。若い世代のリーダーの間にも国の繁栄に尽くしてくれた高齢者への尊敬の念が強く感じとられていることは、高齢者が今もなお国家の繁栄を祈り、多大なる国家への感謝を持ちつづけている原因の一つであろうが、同時に、若い世代の育成という世代間の継承の使命感を覚えさせるものでもあろう。

国家や社会への貢献・奉仕の意識の強さは、おそらく、特定の教育や政府関係の経歴をもつ世代の高齢者だけでなく、ほかの高齢者や若い世代の人々にも、程度の差はあるにせよ、見い出しうることであるように思われる。いわば、中国の全体の社会的雰囲気がそうなっているように感じられるからである。現に、後述するが、国家の政策としてかかげるスローガンの一つ「老有所為」は＜社会参加＞による社会的貢献を期待する内容のものである。ただ、この国家や社会への貢献・奉仕の意識の強さは、おそらく、現在の幸福感・満足感に大きく支えられているであろうことも見ておかなければならないであろう。この世代は、いくつかの戦争や困難のなかを生き残ったという生存の喜び・幸せを強く感じているだけでなく、加えて、経済的に恵まれた生活（年金等の収入の保障）の満足感も強く感じている。いわば現在のこの生存のレベルの幸福感と生活レベルの満足感が二重になって貢献・奉仕意識を強めていると思われるのである。

(2) 家族・親族の交流

面接聴取に協力して頂いた高齢者5名のうち子供との同居は3名であったが、残り2名も隣居、近居の形態をとっており、子どもの家族との関係が非常に濃かった。孫の面倒を見たり、孫と遊んだり、何かと孫と接触をもつ高齢者も多かった。孫の面倒が見られないために、自らがお金を払ってお手伝いを頼むという事例もあった。年金が充実しているために経済的に独立している家族だけではなく、農業に従事していたEさんのように子供に援助される家族もあるが、経済的な面以上に、

精神的な面において高齢者とその子供達は密接な関係にあることが明らかである。週末や行事毎に子供達が親の家に一緒に集まるということがかなり一般的に行われていることは、家族・親族意識の強さを示す一つの側面であろう。

家族・親族の交流は、同居家族においてはもちろん、核家族化が進行するなかで、親子家族の隣居・近居の形態をとりながら、煩瑣に行われている。そして、その家族の交流、「家族の団欒」を「嬉しいこと」、「楽しいこと」と感じている。とりわけ孫との交流がもつ比重が大きいように見えるのは、「一人っ子」政策のもとでは、注目に値する。中国における家父長的な家族制度はその維持が図られていて、その伝統的な家族制度における家族・親族意識の強さは今日でも家族・親族の交流・団欒を促進し、それが今日の高齢者の「嬉しいこと」、「楽しいこと」の源泉になっているわけである。そして、こうした交流・団欒の行われる順調な家族生活をもてることが幸福なことである。

この伝統的な家族制度の根幹の一つは強い絆の親子関係であるが、それを支えているのは「親孝行」の倫理である。現在の高齢者の世代は、より強く親孝行の倫理を身につけていて、それだけに子どもに対する親孝行の期待は強いと思われるが、現在の子どもたちは、それに十分に応えているような状況が見られる。この親孝行の倫理は、「一人っ子政策」のもとにおいて、どのように活かされていくのか、やはり注目に値しよう。

伝統的な家族制度は、「男は外まわり、女は家まわり」の倫理にも見られるが、これも現在も活かされていて、その考えのもとに家事分担が行われる傾向がある。ある高齢者の表現を借りれば、「この考えのもとに仕事に打ちこんできた、今でも妻の家事は尊重している」ということである。もっとも、このような伝統的な家事分担は、新しい状況の変化（例えば共働き、男性の趣味としての料理）のもとで少しずつ変化しつつあるようで、現に、家事の新しい協力分担が行われてきている傾向も見られる。ある女性の高齢者は「特に女性は社会に奉仕しなければならない」、「中国の女性としてまず自立しなければならない」と言っているが、このような考えが広まれば、それはもちろん、家事分担の変化を促すかもしれない。

(3) 趣味やスポーツの活動

友人との交流や地域社会における近隣の交流は、場合により、あるいは、必要によって、相互支援の活動など、それなりの展開を見せるようである。しかし、友人との交流や近隣の交流については、それなりの喜びや楽しみを感じていると思われるものの、貢献・奉仕活動や家族・親族の交流と同じように、あるいはそれ以上に、「嬉しいこと」、「楽しいこと」あるいは「重要なこと」、「大切なもの」などと感じている高齢者は5人の中にはいない。

趣味・スポーツの活動はどうか。退職者の施設・活性化センターを利用したクラブ活動、例えば老年大学を通じての趣味・スポーツの活動などはもちろん、個々人の思い思いの趣味・スポーツ活動も活発に展開しているように見える。5人の高齢者があげた趣味・スポーツは、散歩、マラソン、気功、囲碁、読書、書道、買い物、料理などで、これだけでも多彩であるが、一般的には、気功や書道など、中国の古い伝統をもつ趣味・スポーツはかなり活発なようである。家事は多くは女性に期待される傾向があるけれども、男性も料理を趣味としてあげている場合が示唆するように、男性も家事を受け持つ場合が少なくないようで、家事は女性の役割という傾向は薄くなってきているのかも知れない。いずれにしても、高齢者の趣味・スポーツは、三河市の施設にも助けられて、多彩に行われている。こうした、趣味・スポーツは、身体的・精神的な健康の維持に役立っているだけでなく、楽しみや喜びの源泉にもなっていると思われる。しかし、趣味・スポーツについても、貢献・奉仕活動や家族・親族との交流と同じように、あるいはそれ以上に、「嬉しいこと」、「楽しいこと」あるいは「重要なこと」、「大切なもの」などと感じている高齢者は5人の中には見あたらない。

以上の5人の高齢者の面接聴取に関する限り、中国における都市高齢者の「生きがい」は、友人関係・近隣関係や趣味・スポーツよりも、仕事を

通じての社会的な貢献・奉仕と伝統的な家族制度における家族・親族の交流のほうに、深いかかわりをもっている、ということができよう。

3．高齢者の生活意識と生きがい

三河市の高齢者5人の事例をより深く理解するためには、中国の高齢者の生活意識と「生きがい」をめぐる社会的状況について、多少とも見ておくべきであう。

1996年8月29日『中華人民共和国高齢者権益保障法』が公布され、この中で、高齢者の社会保障に関する施政方針が次のように示された[6]。「国家と社会はあらゆる措置を取り、高齢者への社会保障制度を整備し、次第に高齢者の生活、健康及び社会発展への参与の条件を整え、扶養、医療、社会参加、生涯学習、娯楽を実現」すべきであり、「各レベルの人民政府は高齢者事業を国民経済と社会発展計画に取り組」み、「全社会の敬老、高齢者を扶養する宣伝教育活動を広げ、高齢者を尊重し、心から助ける社会的風習」を樹立しなければならない。そして、「高齢者の扶養は主に家庭を頼り、家族員は高齢者の世話をすべき」であり、また「国家は高齢者の合法的権益を保障」し、「差別、侮辱、虐待あるいは高齢者を遺棄する行為を禁止すべき」である。

さしあたりここで注目したいのは、一つは、高齢者の社会保障について、国家の役割を掲げると同時に、中国の伝統的な家族の尊重を強調していること、二つは、「扶養、医療、社会参加、生涯学習、娯楽」は、いわば高齢者の生きがいに深くかかわっている内容になっていること、である。

前者についてはまた後述するが、後者については、少々説明が必要である。「老有所養」＜扶養＞は、物質的・精神的な両面の基本的保障を意味し、経済収入保障・日常生活の世話、精神的な慰めの3つが含まれる。「老有所医」＜医療＞は高齢者に対する疾患の予防や治療、健康回復などの保証が与えられ、必要な処遇を受けられることを指している。「老有所為」＜社会参加＞は、高齢者の体力・専門知識・趣味により、定年退職後も引き続きそれらを生かし、社会に貢献することを意味する。「老有所学」＜生涯学習＞は、高齢者が自分の健康保持や発展を図ろうとするとき、各種の知識を獲得する機会が保障されることを指している。そして、「老有所楽」＜娯楽＞は、各種の文化、芸能活動の参加によって、精神的な充実感が得られることを意味する。

直ちに気付くように、＜扶養＞に関する「精神的慰め」の意識、＜医療＞による健康、＜社会参加＞の社会的貢献、＜生涯学習＞、＜娯楽＞による「精神的な充実感」、など生きがいに深くかかわっていることは明らかである。なかでも、「老有所為」に関しては、ある中国の研究者は「中国では『生きがい』とは『老有所為』と言います。『老いて為すところ有り』、それが生きがいと私たちはいってきました」と語っている[7]。生きがいは、ここでは、＜社会参加＞、社会的貢献の次元において理解されている。

この5つの「老有」のスローガンが中国の方針として掲げられている社会的状況を背景に、われわれは三河市の高齢者の事例を理解すべきであろう。

現実はどのような状況にあるか、やや具体的にみていきたい。

まず、高齢者の収入であるが、ある資料によると[8]、1991年、都市高齢者1,961元、都市勤労者2,340元、農村高齢者773元であったといい、都市と農村の間の格差が大きく、都市でも高齢者より勤労者が多くなっている。年金受給者は、都市高齢者72.9%、農村高齢者は5.7%となっており、やはり都市と農村の格差は大きい。農村高齢者の773元の収入源は、家族37.1%、自治体6.9%、政府5.5%、就労50.5%の内訳になっていて、家族・就労の比率がきわめて大きい。これに対して、都市高齢者の収入源は、63.7%が年金、子女またはその他の親族の援助16.8%、高齢者自身の就労が14.6%を占めていて、年金の比率がかなり大きい。

これでみると、都市高齢者は農村高齢者に比較してかなり恵まれていることになるが、高齢者が家庭および社会から衣食の満ち足りる生活条件を得られているかどうかについては、「満足してい

る」高齢者は、都市83.2%、農村77.4%、「満足していない」高齢者は都市3.7%、農村7.0%となっていて、都市と農村の間に、それほどの大きな差はない。「満足している」高齢者が非常に多いのである[9]。前にも言ったように、現在の高齢者は、いくどかの戦争や困難を生き抜いてきた世代であるため、昔と比較すれば今の生活はかなり楽になったという実感が強いのではないかと思われる。いわば生存レベルの満足感である。

もちろん、この満足感は、それだけでなく、家族生活とも深くかかわっていると思われる。1990年の中国におけ家族形態は、「二世代」家族68.0%、「三世代以上」家族18.4%となっていて、二世代以上の家族が86%に達している[10]。このなかには、高齢者同居家族が多く含まれているであう。ある資料によると、高齢者の老後生活は、6割以上の高齢者がその子女たちと同居生活している「同居養老」であり、都市では30%、農村で13%の高齢者は、身辺に子女が居ない「別居養老」であるという[11]。中国においては、「晩年になって子供や孫に囲まれ、話を楽しみ、賑やかに晩年を過ごすのは昔からの高齢者の最大な望みであって、現在でもそのような考えをもっている高齢者は少なくない。子供が仕送りだけを行い、他に何もしなければ、高齢者はむしろ淋しさが増すとも言われる」[12]。高齢者は「同居養老」がなによりも「精神的慰め」の源泉になっているわけである。実際、「都市においても農村においても、中国に伝統的な高齢者を尊重する風習が発揚され」、「世代間関係が融和し、大多数の高齢者は子女に尊敬され、晩年の生活を楽しんでいる」。山東省の調査によれば、「息子が毎日来る69%」、「娘が毎日来る16%」、「孫が毎日来る64%」、そのため、「孤独感はない94.4%」、「孤独感がある5.2%」、「とても孤独0.3%」の精神状態である[13]。

世代間関係の融和が「親孝行」によって大きく支えられているのも事実である。子どもが「孝行である」と思っている高齢者は都市で83.5%、農村で81.3%である。「不幸である」と思っている高齢者は都市で2.8%、農村で3.8%にすぎない。敬老意識のある子女は非常に多い[14]。ちなみに、資料はやや古くなるが、しばしば引用される、「年老いた親の扶養について」調査した中国と日本の青少年（18～24歳）の意識調査がある[15]。それによると、中国では、「どんなことをしてでも親を養う66.2%」、「自分の生活力に応じて親を養う26.0%」、「なるべく親自身の力や社会保障にまかせる1.7%」、「一切親自身の力や社会保障にまかせる0.6%」となっているが、これに対して、日本では、それぞれ、25.4%、58.5%、8.9%、0.9%となっている。やはり、中国は、親を養う孝行意識をもつ青少年が多いのである。

われわれが5人の高齢者の面接聴取を通じて得た知見、すなわち、中国における都市高齢者の「生きがい」は、友人関係・近隣関係や趣味・スポーツよりも、仕事を通じての社会的な貢献・奉仕と伝統的な家族制度における家族・親族の交流のほうに、深いかかわりをもっているという知見は、このような社会全体の社会的状況の中で、より正しく理解できるものになろう[16]。

付　記

本稿は、中国河北省の三河市における高齢者の「生きがい」に関する調査報告である。この調査は、私（高橋）が北京日本学研究センターに派遣されていた期間に、社会学専攻学生の社会調査の実地演習を主要な目的として行われたものであるが、調査のテーマは、たまたま私が高齢者の生きがいに関する国際比較研究を行っていた関係で、その一環として中国における高齢者の生きがいをテーマに取り上げている。

この調査を実施するにあたっては、非常に多くの人々にご支援、ご協力を頂戴している。北京日本学研究センターには調査実施にあたって全面的なご支援を仰ぎ、特に主任の野村浩一先生には何かといろいろご配慮を頂いた。実際の調査地の選定や情報の提供には、中国社会科学院社会学研究所の張厚義先生と、同じ期間に派遣されていた山口大学教授（現在、神戸大学教授）の佐々木衛先生のご協力を頂いた。両先生には、実地の調査にも同行して頂いている。両先生のご協力がなければ、この調査はありえなかったであろう。調査地

の三河市では、中共三河市委の王振友氏や李連才氏をはじめ三河市の方々に多大のご協力を頂いた。三河市の紹介による5人の高齢者の方々にもこころよく面接聴取に協力して頂いた。これらの多くの人々に、あらためて、心から厚く御礼申し上げたい。

面接聴取は、張厚義先生、佐々木衛先生、社会学専攻の楊健琴、黄晶、干健明、劉暢、李岩の各学生、それに私が行った。記録、翻訳、整理は、5名の学生諸君があたった。この調査結果を報告書の文章としてまとめるに際しては、高齢者能力開発研究会のメンバーの一人、日本女子大学大学院博士課程の黒岩亮子さんに手伝って頂いたが、いわば実質的な執筆者は、もちろん、5名の社会学専攻の学生諸君である。これら5名の学生諸君の地道な作業がなければ、この報告書は生まれなかった。5名の学生諸君とともに行った三河市調査は、私にとって忘れ得ない貴重な経験となった。

注

1) われわれの「高齢者の生きがいに関する国際比較研究」は、高齢者能力開発研究会（代表・高橋勇悦）が長寿社会開発センター委託事業として、1996～1999年度の3ヶ年にわたって行ったものである。この研究成果は、『高齢者の生きがいに関する国際比較研究』報告書（高齢者能力開発研究会、平成9・10・11年版）としてまとめられている。調査の対象地は、イタリアとサンマリノ、シンガポール、沖縄、台湾、デンマーク、アメリカ、フランス、中国、韓国の各都市である。本稿は、この報告書の中国の部分に分析コメントを書き加えたものである（ただし、面接聴取の記録の部分は削除した。これについては前掲書『高齢者の生きがいに関する国際比較研究』平成11年を参照されたい）。
2) 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980。前掲『高齢者の生きがいに関する国際比較研究』（特に平成10年版）の和田修一の論述。
3) 嵯峨座晴夫「アジアの高齢者の生活」（『年金と雇用』14-4)、1996.2。『東アジアの少子化と高齢化対策に関する日本・韓国および中国3ヶ国研究』国際長寿センター、平成8年3月。
4) これらの人口データは、Population Division of United Nations,1995、前掲・嵯峨座晴夫の論文による。なお、若林敬子『中国の人口問題』東大出版会、1989、十時厳周（代表）『日中都市の比較研究』（平成3年度科研費研究報告書）、平成4年、参照。
5) 佐々木衛「現代中国の社会変動論」『九州人類学報』第23号、1995。
6) 以下、東アジア地域高齢化問題研究委員会編『都市の少子高齢化と高齢化社会対策上海市／シンガポール』エイジング総合研究センター、平成10年2月による。
7) 前掲『高齢者の生きがいに関する国際比較研究』平成10/11年3月。
8) 東アジア地域高齢化問題研究委員会編『「中国・韓国・台湾の人口高齢化と高齢者の生活事情」研究報告書』エイジング総合研究センター、平成7年3月。
9) 前掲『「中国・韓国・台湾の人口高齢化と高齢者の生活事情」研究報告書』。
10) 国際長寿センター『東アジアの少子化と高齢化対策に関する日本・韓国および中国3カ国比較研究』平成8年。
11) 前掲『「中国・韓国・台湾の人口高齢化と高齢者の生活事情」研究報告書』。
12) 東アジア地域高齢化問題研究委員会編『都市の少子高齢化と高齢化社会対策』エイジング総合研究センター、平成10年2月。
13) 前掲『東アジアの少子化と高齢化対策に関する日本・韓国および中国3カ国比較研究』。
14) 前掲『「中国・韓国・台湾の人口高齢化と高齢者の生活事情」研究報告書』。
15) 総務庁『世界青年意識調査（第4回）結果報告書』、昭和63年1-6月。
16) 高齢者の生きがいに関する中国と日本の比較については別稿を用意するつもりだが、さしあたり、次の2点を指摘しておきたい。一つは、日本における都市高齢者の「生きがい」は、ある意味での仕事を通じての社会的な貢献・奉仕や伝統的な家族制度における家族・親族の交流に求められていると同時に、友人関係・近隣関係や趣味・スポーツにも求められているが、あえて言えば、後者の方向により傾斜してきているのではないかということ、二つは、しかし、少なくとも、高齢者の能力活用を含む社会参加・社会活動による社会的貢献への期待が強いという意味においては、日本における国や自治体の生きがい政策と中国における国（および各レベルの人民政府）が掲げる5つの「老有」スローガンとは通じるものがある、ということである。

Key Words（キー・ワード）

Ikigai (Worth Living)(生きがい)，**Social Contribution**（社会的貢献），**Social Charity**（社会奉仕），**Family**（家族），**Kin Network**（親族）

Ikigai (Worth Living) and the Aged in China

Yuetsu Takahashi* and Ryouko Kuroiwa**

*Otsuma Woman's University
**Japan Women's University
Comprehensive Urban Studies, No.69, 1999, pp.109-118

This text is the case study concerning five aged's *Ikigai*(worth living) in China. We distinguished the *object* of Ikigai and the *feeling* of Ikigai. For listening to the *feeling* of Ikigai in the interview we used the word such as 'pleasure', 'satisfaction', 'happy', 'fulfilled'. We also used the words deeply related to these words; 'gladness' ,'enjoyment', 'achievement'. As a result, the interview of five aged clarified that aged's Ikigai in China depend on more social contribution by work or social charity and traditional family or kin network than friend relation, neighborhood, hobby, sport and so on.